

ブレイク研究の新たな視座
— 道徳律廃棄論者とランターズ —

宮 町 誠 —

(I) 1970～90年までのブレイク研究

ブレイク研究家であるデビット・パンターは1970年代から1990年までのブレイク研究を概観するに先立って、文学批評の分野で一つの革命が進行していたと指摘し、その変革を2つのイメージで紹介している¹。つまり、最初のイメージは生活と思想の中心的価値観が根源的にその従来からの地位から外される「コペルニクスの転換」であり、具体的には意識から無意識へ、男性中心の座標軸の見直しなどの変革である。もう一つの動向は海岸に打ち寄せる波のイメージである。永遠に反復する波の侵食力は侮れない改革の力を秘めている。この70年代以来継続している脱中心化と侵食力（ブレイクの表現では「腐食力」）は、ブレイク研究の面では具体的には次の6つの姿をとっている²。

パンターが第1に挙げるのは思想の脱中心化を推進したマルクス主義である。知性が構築してきた思想自体が経済活動に条件付けられており、根本原理と信奉されてきた思想が単にその社会の階級と経済構造の反映に過ぎないことが明らかになった。第2の変革は物質から精神の分野へ及び、心理分析の発達に伴い、判断力の中心であった「自我」の地位が揺らぎ、潜在意識、無意識、イテ等の精神活動に関心が移行した。さらに、人類学や言語学の分野からもたらされた第3の波は構造主義と呼ばれた。つまり、神話や言語に形象化されているように、人間の思考、発話、行動範囲を限定する一連のしぼりがあることが明らかとなった。第4の波はデリダの脱構築によって代表されるポスト構造主義である。全てを包括する規範を希求した構造主義とは異なって、作品への書き込みや、個別の断片（ブレイクの表現では‘minute particular’）の重要性を再発見した。断片のテキスト、連続する単語に注目することで、ブレイクの後期予言書に見られるように統一性、合理性追求という呪縛からの解放が可能となった。脱中心化の志向は第5の動向、フェミニズム側からの研究においても顕著である。歴史、社会、言語に蔓延する家父長的価値観の指摘とその見直しはブレイク研究の一つの流れとなった。そして、最近の変革の波は新歴史主義となって現れ、テキストに対してその歴史的意味合いに敏感となり、コンテクスト（ブレイクの場合は挿画を含む）との相互関係性に関心を向ける立場である。

この視点に立てば、ブレイクのテキストは社会的、文化的歴史において単なる受動的な分析対象ではなく、創造的な関係性の宝庫となる。

1990年代のブレイク研究ではこの第6の波がさらにその勢いを増していると言える。その記念碑的出版物はブレイクの作品を総合芸術として捉えた、モートン・D・ベイリー編集による *William Blake: Jerusalem* (1991)³ と、1780年の歴史的ブレイクを検証した、E・P・トムソンによる *Witness Against The Beast: William Blake and the Moral Law* (1993)⁴ である。前者は現代の最高の印刷技術を駆使して、ブレイクの彩飾本の全体を復刻する壮大な事業の最初の成果であった。18世紀当時の印刷技術、インク、彫版技術を綿密に調査し、当時のコンテクストに置いて彫版画家ブレイクを再構築する試みである。後者は歴史学者によって著された研究書であり、デビット・パンターが指摘した1970年代からの文学批評の動向がある意味ではその中に全て集約されていると言える。トムソン自身は著名なマルクス主義者でもあり、英国の労働者の歴史を研究してきた著者が、18世紀後半のロンドンで彫版画家として当時の労働者階級に属していたブレイクに関心に向けたことは当然の帰結とも言える。また、この著作においては脱中心化の視点は明確に定義され、全体を通して堅持されている。従来のブレイク研究は結局はオックスフォード大学とケンブリッジ大学を頂点とする古典的な知的伝統の中で位置づけられ、19世紀の知的伝統を形成してきた「合理主義、政治経済、功利主義、科学、進歩主義」等を包含する「啓蒙運動の進歩」(the progression of Enlightenment)の域を逸脱することはなかった⁵。しかし、ブレイクの想像力の根源はそれとは全く異なる知的伝統の中で生まれ、さらに、単に異なるばかりではなく、その英文学の主流とは対立する「反啓蒙運動」(counter-enlightenment)の衝動がブレイクの本質であったとトムソンは論じている。彼はイギリス市民革命の1640年代から18世紀後半に至る革命的急進思想の系譜を詳述し、ブレイクの異端的な宗教と政治的急進主義の基本的思想を分析し、最終的には、道徳律廃棄論(antinomianism)という隠されてきた伝統の中にブレイクを位置づけている。

また、最近出版されたブレイクの伝記⁶の著者であるピーター・アクロイドは1990年代のこの様なブレイク研究の動向への配慮も怠ることなく、18世紀中葉から後期にかけてのロンドンにおける新興キリスト教諸派についてその伝記の中で頻繁に言及している。当時の芸術家、あるいは手に職を持つ職人の世界においては「奇妙で正統ではない様々な信仰宗派」に触れることは珍しいことではなかったとして、ブレイクと面識のあった画家、彫版画家、文人の間で、オカルト的儀式を含めて如何に多様な急進的、非正統的信仰が蔓延していたかを例証している⁷。また、スエーデンボルグの宗教思想に批判的な態度をとるに至ったブレイクが、パラクレサスやベーメの作品に親しむようになり、その過程で、彼らの思想の基盤となっている道徳律廃棄論の伝統を理解し、その教義や信仰を一貫したものとしてそのまま受容するのではなく、その心的態度をブレイクの内的欲求に応じて習得していった過程を辿っている⁸。また、ラムベス地区在住時代の伝聞として伝えられている自宅の庭での裸のブレイク夫婦に関連し、

ブレイクの伝記作品の中では初めて、道徳律廃棄論からの分派であるランターズとの関連にも言及し、特にその裸体主義の影響の根拠として紹介している⁹。また、クエーカー教や道徳律廃棄論における暴かれた真理としての裸体礼賛の思想も併せて紹介している。さらに、ブレイクが生業としていた彫版画家という職業自体が体制に批判的な急進派に属していたとしている。それはブレイクを始め、多くの彫版画家に挿し絵を依頼した出版者ジョセフ・ジョンソンによる出版物、および、その原著者一覧を見れば一目瞭然である。ヘンリー・フゼリー、メアリー・ウールストンクラフト、トム・ペイン、ジョエル・バーロウ、ジョセフ・プリーストリに加えて、ホーン・トックとウィリアム・ゴットイン等、当時の芸術、女性運動、政治、思想界でそれぞれ無神論者、国賊として非難中傷される急進的な人物達である¹⁰。伝記作家のアクロイドは最新の研究業績を駆使しつつ、当時のブレイクを活写しているが、18世紀のロンドンの職人の間に定着していたとされる道徳律廃棄論、ランターズ、そして、千年至福王国説(millennarianism)¹¹の内容については具体的な詳述は避けている。

以下の拙論では道徳律廃棄論とブレイクの関係を最初に指摘したA・L・モートンの著作¹²を中心に道徳律廃棄論の一つのセクト、あるいは当時の一つの動向であったランターズとその思想の源泉について吟味し、その特徴をまとめ、今後のブレイク研究の一つの視点を確認しておきたい。何故ならば、モートン自身が指摘するように、ブレイクは確かに難解な作品を残しているが、その難解さの一部は、「ブレイクがその中で書いた伝統を我々が忘れてしまったという理由で、我々自身によって作られてきたものである」¹³という反省があり、その指摘が現在までのブレイク研究では十分生かされていないのではという認識があるからである。

(II) 道徳律廃棄論とブレイク

ブレイクを「小商人や職人たちの子孫によって、執拗に支持された革命の伝統」の中に位置づけたA・L・モートンの著作は、詩人の生涯と作品は「英国急進主義の新旧の傾向の間の相克」を例証しているとし、その「イギリス共和国」の伝統との比較を通してブレイクの特質を明らかにしている。モートンは17世紀の革命の数十年間に英国、とりわけロンドンにおいて広がっていた道徳律廃棄論者の様々な分派の教義の中にブレイクの思想の源泉を認めた。道徳律廃棄論者とは「17世紀の特定セクトをさすことが時々あるが、また信仰や組織で結合しているのではなく、関係ある教議やお互い容易に区別しにくいセクトを支持する諸セクトや集団を表すものとしても、広範囲に用いられ」、そして、ブレイクに伝わったとされる広義の道徳律廃棄論の特徴をモートンは4つの項目として挙げている¹⁴。

第1に、神の性質と人間の間を扱う思想群がある。すべての道徳律廃棄論者は神は人間の中に存在すると信じ、大部分の道徳律廃棄論者は神は創造された物すべてのなかに存在すると信じ、多くの道徳律廃棄論者は神はそれ以外の存在を持たないと信じた。ブレイクはこの最後の意見を評価した。

第2に、道徳律および儀式的法則はもはや神の民に対しての束縛ではなく、それは今まで持ち上げられてきた呪いの結果で、それを押しつけようとする正統派は反キリスト教的であるという考えがある。

第3は、第2と密接な関係があり、「永遠の福音」という言葉、ブレイクが自己の最大の偉大な詩の題として使った言葉、と関連のある実に複雑な思想である。

第4は以上すべてから生ずるのだが、バビロンの破壊とエルサレムの建設という象徴体系があり、これはブレイクの作品に充満しており、革命の時代との関連は強調する必要がないほどの象徴体系である。

そして、ブレイクの思想の核心とも言える「永遠の福音」の思想の源泉を辿っている。この教義の源泉は12世紀のイタリアの神秘家フィオレのヨアキムであるとし、その3つの時代からなる世界の歴史観を紹介している。つまり、キリストの死と共に終わる父の時代、信仰と孝養の息子の時代、そして、差し迫っている神の子供たちのための愛と霊的自由の時代である。第1の時代の聖書は旧約聖書、第2は新約聖書、そして、第3の霊のきたるべき時代は完全な福音「永遠の福音」が現れることになっている。この永遠の福音の完全な真理は、新しい聖典のなかにではなく、神が人間の心を照らす聖書の霊的な感覚の新しい啓示のなかに、現れることになる。この時代には、神は人間の内部にあり、それゆえ崇拜、儀式、教会、法および道徳律の存在する形態は、すべて無用になる。外部からの力として現れる代わりに、神は今や人間の内部にあり、神と人間との一致が完全に成し遂げられる¹⁵。

また、この12世紀のヨーロッパに起源を持つ思想が18世紀半ばのロンドンに生まれたブレイクに至るまでの歴史的経緯は次の通りである。ヨアキムより約1世代後にフランスのアムリア人たちの間で新プラトン主義的汎神論が付加され、ヨーロッパ全体に広がっていった。その後、ドイツに生まれた新興集団の中で「自由精神の兄弟」という団体がその教義を実践していたことが報告されている。その団体はヨキアムの言う第3の霊の時代の到来を確信し、神の完全性の中での生活を実践した。1525年のドイツ農民蜂起を指導したトーマス・ミュンツァーはこの教義に新たな社会的側面を付加して、改革を試みた。その影響は様々なルートで英国に浸透し、特にロンドンと西アングリア地方の職人達に伝播した¹⁶。そして、17世紀の英国の騒乱時期にトーマス・エドワードがランターズの教義を非難する一文を残している程度には英国にも定着していた。

続いて、モートンは当時流布していた反ランターズ文書の中からランターズの教えを要約し、ブレイクの作品に現れた表現と比較している。神の偏在性については『天国と地獄の結婚』から引用している。

また、神の律法、およびその違背から生ずる罪の概念とその否定については『永遠の福音』から引用している。

また、神を内に秘めた人間の威厳を強調しつつ、新しい人間観「神聖なる人間性」を主張す

る点でもランターズの教義と一致していると言える。『自然宗教というものは存在せず』、『エルサレム』からの引用がされている。

続いて、天国と地獄の概念、地獄と悪魔の非存在、苦悩と闘争の後に到達できる「永遠の福音」の世界を特にランターズの一人であるアビーツァー・コップの著作と比較しつつ論じ、次の作品に言及している。ラーヴァター『人間に関する格言集』に書き込まれた短評、『エルサレム』、「地獄の格言」、『永遠の福音』、「ティルザによせて」。

さらに、正統派の教会批判の点でも共通点を指摘している。そして、ランターズによる教会批判と「小さな宿無し」、「私はすべて黄金でできた礼拝堂を見た」、『最後の審判の幻覚』、「大地の応え」等の作品との類似性を指摘している¹⁷。

しかし、この指摘は恣意的で、断片的類似性であり、ブレイクのそれぞれの作品のテーマとの関連性、あるいは、隣接するテーマやイメージや象徴との整合性は例証されてはいない。また、ブレイクの歴史的、思想的変容との関連性についても論証は全くされていない。今後はブレイクの初期の作品から晩年の作品にかけて、その詩行やイメージに見られる、広くは道徳律廃棄論、そして、狭義においてはランターズの思想の痕跡を通時的にそして共時的に辿る研究が求められている。そのような視点から新たな光を当てることによって、従来、晦渋とされてきたブレイクの作品ばかりか、比較的に理解が容易であるとされてきた初期の作品さえも、その責任を読者自身が引き受けることによって、新たな解釈の宝庫となる可能性を秘めていると言える。トムソンの論点も正にこの点にあった。

I am arguing that these ideas are intrinsic and central to the structure of Blake's thought, and that they remain so, even when he passes from revolutionary enthusiasm to more quietist conclusions, and equally when he is subject to very strong Deist and atheistic influences and when he has become reconciled to a (highly unorthodox and idiosyncratic) Christian faith.¹⁸

私はこれらの理念（道徳律廃棄論）はブレイクの思想の構造にとって本質的で中心的なものであると論じ、ブレイクが革命を求める熱狂から冷静な結論に至る過程においても、また同様に、非常に強烈的な理神論や無神論の影響に晒された際にも、そして、一つの（非常に非正統的で特異な）キリスト教の宗派に改宗した際にも、その理念は変わらなかった、と主張している。

ここでは、ブレイクの作品との偶発的な類似性に捕らわれずに、ランターズの思想の全体像の把握に努めたモートンの著作に沿って、その特徴をまとめておきたい。

Ⅳ ランターズの根本思想

17世紀のランターズの思想と時代についてその理解を目指す際の前提として、宗教と政治は

密接不可分の関係にあり、20世紀の現代において確立されてきた宗教と政治の分離の考え方は、前者が現代人にとって非現実的である以上に、後者の価値観は当時の英国人にとってはグロテスクであったことを踏まえる必要がある。ブレイクの思想の形成期である18世紀中葉はすでに世俗化の傾向はあらゆる分野に見られたが、時間的にはミルトンの時代から100年程度しか離れていなかったことを念頭に置いておかなければならない。あるいは、宗教上の信条と政治的な理念の分離という20世紀の先入主からの解放か、少なくとも、一時的な棚上げが前提とならなければならない。

また、17世紀の英国における教会と庶民との関係においても、為政者にとって信仰と政治的イデオロギーが切り離し難かったように、庶民の信仰生活と日常の営みはほぼ一体であったことを改めて確認する必要がある。キリスト教とその教義が肉化した教会は、現代の敬虔なクリスチャンの生活を大きく凌駕して、当時の庶民の日常生活の大きな部分を占めていたことを前提としなければならない。この2つの前提に立って、17世紀の宗教改革の直後に急速に勢力を伸ばしたランターズの思想を整理しておこう。

ランターズの中心的な教義は神と人間の本質とその両者の関係にある。そして、罪の概念の否定、天国と地獄の非存在の考え方もすべてこの教義に起因することになる。その教義の最も明確で具体的な表明は次の引用にある¹⁹。

They maintain that Got is essentially in every creature, and that there is as much of God in one creature as in another though he doth not manifest himself so much in one as in another: I saw this expression in a Book of theirs that the essence of God was as much in the Ivie leaf as in the most glorilous Angel.... They say there is no other God but what is in them and also in the whole Creation and that men ought to pray and seek to no other God but what was in them.

The titles they give God are these: They call him The Being, the Fullness, the Great Motion, Reason, the Immensity.

彼ら（ランターズ）は、神は本来、あらゆる被造物のなかに宿り、ある被造物に宿る神は、他の被造物においては前者程多く姿を現さないとしても、後者と同じであると、主張する。私は彼らの書物のなかに、次のような表現を見た。神の本質は最も荘厳な天使のなかに存在するのと同じく、蔦の葉のなかにも存在する²⁰。…自分たちに内在する、そして全ての創造物の内以外に神は存在しないと、内在する神以外に祈り、求めてはいけないと彼らは語っている。

神に捧げる称号はこの通りである。つまり、彼らは神を絶対的存在、完全、大いなる現象、理性、無限と呼んでいる。

また、同じ著者は神と人間の関係に関しては次のようにランターズの信条を解説している。

That man cannot either know God or believe in God or pray to God but it is God in man that knoweth himself believes in himself and prayeth to himself... hence they allege that man differeth in nothing from the brut beast but only that God doth manifest himself more in man than he doth in the beast.

人の内にあり、自らを知り、信じ、祈る神以外に人は神を知り、信じ、祈ることは出来ない。従って、彼ら（ランターズ）は人は咆哮する獣と何ら変わりはないと主張する。違いは神は獣より人のなかにより多くその姿を現す点である。

モートンは上記のようなランターズの神概念あるいは人間理解を神学上では次のように位置づけている。つまり、ランターズの思想は聖書の厳密な字義通りの解釈と恐ろしい地獄の存在を主張し、神の至上権と絶対的正義を強調する正統派のカルビン主義と、聖典の権威よりも内なる光りを優先し、道德律と地獄の存在を全面的に否定し、神の恩寵と偏在性を強調する道德律廃棄論のほぼ中間に位置しているのである。そして今後のブレイク研究においては、この理念を踏まえた上で、ブレイクの作品、詩行、イメージ、テキストとデザインの関係性を見直す必要がある。

例えば、*The Songs of Innocence* の中に “The Divine Image” という作品があり、その第3連に上記のランターズの神性と人間性の同一性が謳われている。

For Mercy has a human heart
Pity a human face:
And Love the human form divine,
And Peace the human dress.²¹

(慈悲には人の心あり、
憐憫には人の顔あり、
愛には神聖な人の姿あり、
平和は人の衣服をまとう。)

従来は、“the human form divine” という表現は、ジョセフ・H・ウィックステード²²に始まり、スタンレー・ガードナーによって集約されているように、比較的単純にブレイク自身の特異な信条の表明として処理されてきた²³。そしてこの概念が1970年代には「無視され、誤

解されてきた」としているが、その神概念が他のキリスト教の基本概念（罪、悪、正義等）に対する影響については言及がなく、全く孤立した概念として扱われている。“human form divine”を鍵概念として位置づけ、ブレイクの著作全体の分析を試みたアン・K・メローは、ブレイクの新約聖書の解釈に17世紀の律法廃棄論の影響は認めつつも、ブレイクと同宗派とは1789年以前の交渉はなかったとしている²⁴。これでは、上記の鍵概念とこの詩を含む詩集 *The Songs of Innocence* の影響関係を否定したことになる。また、ハロルド・ブルームは神概念よりも人間性の特質を示す4つの徳目に注目し、イノセンスの世界に居ながら、抽象の経験界に迷い込んでしまい、この詩における神は「抽象概念の怪物」に墮していると批判している²⁵。E・D・ハーシュは「神性」(divinity)の分析に焦点を合わせ、人間とキリストの同一性による内在する神 the immanent God と、父なる神とキリストの同一性による超越する神 the transcendent God との関係性からブレイクの愛の本質を定義しようとしている²⁶。しかし、“human form divine”の表現が示すように、神学的なあるいは、抽象的な議論の陥穽を逃れ、人間性を一義的な視座とした理解がよりブレイク的解釈と言えるだろう。

(M) 善悪等の対立概念の包摂過程

神と人間の同一性が確立された時には、人間の為す全ての営みも、従来悪と呼ばれていた所業も、神のなす為の一環であり、本質的な悪と呼ぶ必要はなくなる。神と対立する悪の権化である悪魔も、独立した存在ではなく、神の一側面となる。従って、地獄も天国の一側面となる。このように従来は対立概念として捉えられてきたものが、一方に包摂されてゆくプロセスそのものが、ブレイク的弁証法と言える。まさに、ブレイクの作品のタイトルにあるように「天国と地獄の結婚」が成立するのである。ランターズの真理を極めた者にとっては「悪魔は神であり、地獄は天国であり、罪は神聖、地獄落ちは魂の救いなり」²⁷とあるように、前者が後者の概念に包括されてゆくのである。このような逆説による真理の把握は宗教的ディスコースの常套手段である。歴史的には、17世紀のランターズはこの教義を説教に留まらず、実生活でも実践する者も出現したために、当局から厳しい糾弾と迫害を招くことになった。しかし、この対立する概念の合一はブレイクの詩やデザインには頻出しており、この統合の理念の源泉はランターズの根本理念である神性と人間性との合一に発している。ここでは勿論その全てを検証することはできないので、同じように、“The Divine Image”からの詩行、最終連で見ておこう。

And all must love the human form,
In heathen, turk or jew.
Where Mercy, Love & Pity dwell
There God is dwelling too.

(もの皆、人の姿を愛し
異教であれ、トルコやユダヤ人であれ
慈悲と愛と憐憫が宿るところに
神もまた住みたもう)

第3連で確認したように、ここでは“the human form”が強調され、人種や宗教の相違を超えた「人間の姿」の元に、異教性、反キリスト教性が包摂されていていっている。最終2行に示されているように、人間的特質が在るところにこそ、神、神性もまた宿っているのだから。しかし、従来の解釈では人間性に宿る神性はどうしても条件付きであった。ヘザー・グレンはこの小品の丁寧な分析の後で、この最後の2行はある面では神の内在性を肯定しながらも、その肝心な所在地、つまり人間性については、遠慮しつつも、神の内在性は“Mercy, Love & Pity”という理想的な徳目を達成した“human form”が前提条件となっている²⁸。そしてその特質は、ブレイクの著作に頻繁に繰り返されるように、ブレイクの解釈に基づくイエス・キリストの特性でもある。ブレイクの後期の作品*The Everlasting Gospel*の一節にその典型が見られる。ここではイエスはマグダラのマリヤに対して、性愛の神聖性を説き、偽善に基づく恥や罪の社会的通念を廃棄し、神性の内在する人間の姿を強調している。

Twas Covet or twas Custom or
Some trifle not worth caring for
That they may call a shame & Sin
Loves temple that God dwelleth in
And hide in secret hidden Shrine
The Naked Human form divine²⁹

(それは単なる欲望、あるいは慣習
注目にも値しないつまらないもの
人は愛の神殿を恥じそして罪と呼ぶ
実はそこに神が住まい
秘密の聖堂に身を隠す
あの露な神聖な人の姿に)

従来、ブレイクの特異的に個性的、あるいは、常軌を逸した、ついには狂気による理念、イメージと呼ばれてきたものが、ランターズの根本理念に立ち帰って解釈する時、その真の妥当

性を初めて開示するのである。このような視点を確立し、ブレイクの初期の作品から丹念に読み直す作業が求められている。この視点が正にこれからのブレイク研究にとっては、従来の正統の英文学研究からの逸脱であり、「コペルニクス的転換」であり、執拗な反復と複眼的な侵食力の源とならなければならない。

注

1. David Punter, ed., *William Blake* (Macmillan Press, 1996) 5.
 2. Punter, 6~13.
 3. Morton D. Paley, ed., *William Blake: The Emanation of the Giant Albion* (The William Blake Trust/Princeton University Press, 1991).
 4. E. P. Thompson, *Witness Against The Beast: William Blake and the Moral Law* (The New Press, 1993).
 5. Thompson, xiv.
 6. Peter Ackroyd, *Blake* (Sinclair-Stevenson, 1995).
 7. Ackroyd, 100.
 8. Ackroyd, 155.
 9. Ackroyd, 158.
 10. Ackroyd, 162~63.
 11. この宗教運動と1790年代のブレイクとの関係については次の著作が詳しい。Jon Mee, *Dangerous Enthusiasm: William Blake and the Culture of Radicalism in the 1790s* (Oxford University Press, 1992).
 12. A. L. Morton, *The Everlasting Gospel: A Study in the Sources of William Blake* (Lawrence & Wishart, 1958) and *The World of The Ranters: Religious Radicalism in the English Revolution* (Lawrence & Wishart, 1970).
 13. A. L. Morton 著, 松島正一訳『ブレイクとランターズ-ブレイク思想の源泉』北星堂書店, 1996年, 122。
 14. 松島, 65。
 15. 松島, 66。
 16. *The World of Ranters*, 71~72.
 17. 松島, 67~72。
 18. Thompson, 20.
 19. *The World of The Ranters*, 73.
 20. 松島, 76。
 21. この論文におけるブレイクの詩作品の引用は全て *The Complete Poetry and Prose of William Blake*, edited by David V. Erdman, Newly Revised Edition (University of California Press, 1982)による。
 22. Joseph Wicksteed は *Blake's Innocence and Experience* (J. M. Dent & Sons, 1928)の中で、「ブレイクは次の理念を掌握しており、生涯手放すことはなかった」としている。しかし、その理念の源泉には触れていない。
- In Man alone is our vision of God... Man, in his love and beauty, is the Divine Essence itself. (100)
23. Stanley Gardner, *Blake's Innocence and Experience Retraced* (the Athlone Press, 1986) 55.
 24. Anne Kostelanetz Mellor, *Blake's Human Form Divine* (University of California Press, 1974) 16.
 25. Harold Bloom, ed., *William Blake's Songs of Innocence and of Experience* (Chelsea House Publishers, 1987) 5.

26. E. D. Hirsch, Jr., *Innocence and Experience: An Introduction to Blake* (Yale University Press, 1964) 193.
27. *The World of The Ranters*, 77.
28. Heather Glen, *Vision & Disenchantment: Blake's Songs & Wordsworth's Lyrical Ballads* (Cambridge University Press, 1983) 154~55.
29. Erdman, 514.

(みやまち せいいち 本学人文学部教授 英文学専攻)